

インタビュー

わたなべかずたみ
渡辺一民氏に聞く

聞き手

山中一弘
鈴木勇一郎

(二〇一二年四月十九日収録)

編集 山中一弘

渡辺 一民氏略歴

- ◆立教大学名誉教授。
- ◆一九三二年一月生まれ。
- ◆一九五五年三月、東京大学文学部仏文科卒業。
- ◆一九五八年四月、立教大学一般教育部非常勤講師。
- ◆一九六〇年三月、東京大学大学院人文科学研究所博士課程満期退学。
- ◆一九六〇年四月、立教大学一般教育部専任講師。六三年四月、一般教育部助教授。
- ◆一九六五年四月、文学部助教授。七〇年四月、文学部教授。
- ◆一九七二年四月、フランス文学科長(〜七四、三)
- ◆一九七九年二月、フランス文学科長(〜七九、三)
- ◆一九八一年四月、文学部長(〜八三、三)
- ◆一九八三年七月、調査役(〜八五、一)
- ◆一九八九年四月、フランス文学科長(〜九一、三)
- ◆一九九二年一月、新学部設置準備室長(〜九三、三)
- ◆一九九四年二月、新学部設置準備本部長・総長補佐(〜九五、六)
- ◆一九九六年三月、退職。
- ◆近現代フランス文学専攻。文芸評論家。著書に『神話への抵抗』(思潮社・六八年)、『ドレーフユス事件』(筑摩書房・七二年)、『近代日本の知識人』(筑摩書房・七六年)、『フランス文壇史』(朝日新聞社・七六年)、『岸田國士論』(岩波書店・八二年)、『ナシヨナ

リスムの両義性―若い友人への手紙』（人文書院・八四年）、『林達夫とその時代』（岩波書店・八八年）、『故郷論』（筑摩書房・九二年）、『フランスの誘惑―近代日本精神史試論』（岩波書店・九五年）、『「他者」としての朝鮮 文学的考察』（岩波書店・

――立教の戦後史をさぐるという目的で、職員幹部をされた方とか、いろいろな時代のキーマンになった先生方のお話を順次聞こうということで、だいぶお忘れになつていらつしゃつたんですが、いままでに、伊達宗浩さんのお話も伺つてまいりました。

渡辺 もうおいくつ？

――九三歳です。でも、何年か前に自伝をおまとめになりましたので、それをもとにいろいろ確認をするというようなことをしてまいりました。伊達さんに比べれば渡辺先生はまだお若くていらつしゃいますが、立教との関わりはいろいろと深くていらつしゃつて、仏文科の創設のことや、特に大学紛争時代のこと、その後の文学部の立て直し等々、さまざまなポイントで重要な役割を果たされてきたと伺っております。こちらあまり予断を持ってポイントを絞ることなく、むしろ先生と立教のつながり、ご縁みたいなものを経年的に伺つていって、拾つていければいいかなと思つております。

○三年）、『中島敦論』（みすず書房・〇五年）、『武田泰淳と竹内好』（みすず書房・一〇年）ほか。訳書にサン・テグジュペリ『人生に意味を』（みすず書房）、ベルナノス『田舎司祭の日記』（春秋社）、フーコー『言葉と物』（共訳・新潮社）ほか多数。

先生が立教にいらつしゃつたのは、最初は非常勤講師で？

フランス文学科を創る

渡辺 つまりまだ僕らのころは、東大の大学院で博士課程の学生だったのに、そういうことができたわけですね。そもそも僕が立教に来たのは、亡くなった評論家の村松剛、彼と本郷で仲良かったので、正確にいうと本郷の博士課程で彼は僕の一年上なんだけれども、その村松が立教に先にきていて「つまんないから、お前、立教に来ないか」と言うのできたんです。彼は番匠谷さん（英一。ドイツ文学。四八―六一年図書館長）と親しかったものだから、番匠谷さんの縁で一般教育のフランス語の先生になつていたんですね。

当時、フランス語の専任は川村克己さん、手塚伸一くん、あとは武田康雄さんがいた。武田さんは地味な方だった。けれども、お年はずいぶん上で、伊達さんくら

いかな。ずいぶん昔に東大の仏文を出たことは確かなんだが、一九五三年に立教に来られた。川村さんは本郷の助手をして、一九四九年に立教に来た。杉捷夫先生が連れてきたんですね。

——戦前には河盛好藏先生がいらっしゃいましたね。

渡辺 昭和一〇年前後の学生は全部、河盛さんに習ってるんです。そもその最初のフランス語教師は杉捷夫先生で、大学を出て立教に就職したのだから、父親に千早町、東長崎と権名町の間のあたりに立派な家を建ててもらった。その杉捷夫先生が東北大学に移って、河盛さんと仲がよかったので、河盛さんにとをたのんだのですね。河盛さんがその後文理大に移り、戦後は、杉さんが東北大にいながら、こっちでも教えていて、間もなく杉先生が東大の駒場に移ったから、川村さんが杉先生のあとに入ったわけです。

あまり余計なことをいろいろしゃべらないほうがいいけれども、番匠谷さんは杉先生が大嫌い。(笑) それで、川村さんは番匠谷さんにあまり好かれなくて、川村さんの同意をえず村松を採ったわけです。今度は村松が一人で寂しいと僕を連れてきて、二人が専任になったんだけれども、あのころは立教の文学部というのは英文科全盛の時代ですね。一般教育部の研究室は六号館にあった。

——そうですね。

渡辺 そうなの。失礼、はじめは六号館じゃない。研究室はタッカーにあって、それから新築の六号館一階に移った。

——タッカー・ホールですか。

渡辺 それで、英語の先生とみんな同室で、英語の人はみんな威張っているし、つまらないので、村松が仏文を作らないかと言い出して、川村さんを巻き込んで三人で運動を始めたというのがそもその最初です。立教は戦後拡張期で、法学部ができたけれども、これは完全に松下さん〔正寿。五五―六七年総長〕の主導下にできた。立教大学を拡大するためには法学部を作らなければということ、松下さんが運動をして、宮沢先生〔俊義。憲法学。五九―六二年法学部長〕をはじめ、あのころの東大法学部の教授陣を全部連れてきたんですから。

ところが、仏文はそういう機運が全くなかったんだけれども、僕らが内部から言い出して、じゃあということ、川村さんと、それから手塚、要するに四人で、ほう頭を下げて回った。松下さんのところにも行った。独文も一緒に作るということで、番匠谷さんは積極的に賛成してくれた。それから河西さん〔太一郎。経済学。四一―五九年経済学部長〕のところも行ったし、それから菅さん〔圓吉。神学。四六―六一年文学部長〕。当時は菅、番匠谷が文学部関係のボスなんだよ。それに河西

さんのこの三人を説得しなければいけないというので、二年か三年運動をした。

僕が立教の専任になったのは一九六〇年で、仏文ができたのが六三年でしょう。渡辺一夫先生が就任なさるのが六二年なのよね。これはまたいろいろあって、要するに立派な仏文を作るということで、僕は渡辺先生にかわいがられていたものだから、立教に来るように渡辺一夫さんを説得したわけ。渡辺一夫が来るというと、さすがに誰も反対できなくて、渡辺一夫という看板で作るからと言って、みんなある程度納得した。

だから、六二年に発足するはずだったんだけど、最後になると文学部教授会でゴタゴタあって、渡辺先生は東大が定年になってしまう。でも、どうしても作りたいたいというので、渡辺一夫先生は一年、一般教育部にいた。一般教育部は一二号館だったので、先生は赴任したときに朝日新聞にエッセイを書いて、いま新しい大学に行って、新しい研究室になって、私のところはガスが出る。ガスが出て、料理も作れるんじゃないかと思うと書いてるんです。つまり部屋がなくて、あの化学の研究室を渡辺先生に割り当てた。

そのことで宮沢俊義さんが怒っていたということを聞きました。宮沢さんと渡辺一夫さんは仲がよかったから。法学部は創設にあたって六号館を造ったわけだし、

みんな豪華なところにいたわけでしょう。渡辺一夫さんを連れてきて、一二号館の、あの以前の中学校の汚いところで、しかもその中の化学の実験室か何かに押し込んだというので、礼儀を知らんと怒ったんだけど、ともかく渡辺先生はそういうことを気にはなさらなかった。

あのころは仏文科を出ても就職がないころなのです。卒業生の就職口を作るといって渡辺先生が来られた。戦前は、東大でも外国文学科といったら英文でしよう。それから独文よ。戦争中はドイツが同盟国だったから、独文が強い。日本の軍隊というのもドイツ流でしょう。はじめはフランス流だったけれども、普仏戦争にフランスが敗れて全部ドイツ流になったわけです。

フランスは軟弱な国だということで、あのころ金子光晴によれば、「人気のないフランスへ洋行するのは、腰ぬけが助平と定められていて、フランスにはそういうイメージがずっとつきまわっていた。

戦前の旧制高校で、フランス語を第一外国語とするのは文丙です。文丙があるのは表日本で、一高、三高、あとは八高で、それに東京高校、浦和、静岡、それから福岡ね。何しろ七つぐらいしか文丙のある高等学校（旧制）というのはなかった。

東京大学では要するに明治に文学部ができたときから

仏文はありました。明治二十二年だったかな、創設は。昭和まで、独文はほとんど学生が増えたけれども、仏文はいつも三人とか四人の学生数で、ゼロということもあった。フランス人が教師で、日本人ではじめて仏文の教師になったのが辰野隆です。それまでいないわけよ。

要するに仏文が有名になれたのは、小林秀雄とか、三好達治とか、渡辺一夫とか、そのへんが入った大正の終わりね。第一次大戦でドイツが負けて、文学というものの価値が世間に認められだしたとき、どっと仏文志願者が増えて、日本の文壇で仏文の隆盛期が、一九二〇年代から三〇年代にかけて現出するわけです。

そのころは仏文を知らないとか駄目だと言われてはいたけれども、大学として仏文学科があったのは早稲田と慶應。慶應は永井荷風が早くから教師にいたから、仏文好きが入ったわけよね。でも、学科として成立したのは、慶應・早稲田が第一次大戦中で、帝国大学では京都大学ができたのが一九二五年（大正一四年）。あと戦前は九大にできたくらいかな。

僕の話はほうほうに飛ぶけれども、私立大学には、隆盛期というのがあるんだよね。慶應・早稲田は別として、まず法政大学がいつべんに伸びたのは、大正の終わりに漱石の弟子たちを全部教授陣として連れてきて、野上豊一郎さん「英文学」が総長になった。その漱石一門

が引つ張ってきたのが三木清などで、昭和のはじめは哲学というとなら法政大学だったんですね。みんな三木清を慕って法政大学に行っているんだよ。

その次の時代は、昭和一〇年代が明治大学なの。これは、作家の山本有三を明治が、法政にならって強引に引つ張ってきて、山本有三が岸田國士を専任に据えた。小林秀雄も一時、明治に行っていた。だから、昭和一〇年代に明治に仏文ができて、優秀な人材が出たわけだね。私立で仏文のあったのは、早慶の次は明治ね。法政は結局、仏文はできなかった。それで敗戦に至ったわけよ。だから、実質的には微々たるものだった。

戦後にまず仏文を作ったのは学習院です。学習院は安倍能成が大学にするにあたって、鈴木力衛さんといって、モリエールの研究家で、非常に有能な芝居の専門家なんだけれども、その鈴木力衛さんが安倍さんを説得して作った。もつとも、学習院「高等科」には戦前から文丙はあったんだ。やはり皇族の学校だからね。福永武彦とか辻邦生とか、作家をそろえたのが学習院の仏文の特色です。

その次が中央大学かな。これは、戦後すぐ辰野隆、鈴木信太郎が東大を定年になったんだ。辰野先生の定年が一九四八年。その辰野と鈴木の二人を迎えて中央は仏文を作ったわけ。

その次が立教なの。つまり今度は東大の渡辺、その次の杉を招いて、この二人を連れてきて僕らが作ったんだから、戦後仏文ができたのは非常に早かった。そういうことで、渡辺先生ははじめ一年、一般教育部で冷や飯を食ったけれども、一九六三年に独文も一緒に発足して手塚富雄さんが来たわけでしょう。仏文では大先生がいるうちに卒業生を出そうというので、一年と三年を同時に作ったわけね。だから、三年編入もあった。なかにし礼がそれで、第一期生になります。

結局、僕が立教に赴任して一般教育部にいたんだけれども、そういう運動をしたものだから、六〇年に赴任して、六三年には早くも新学科の創立者の一人になったわけです。しかも、渡辺、杉と大先生を連れてきたけれども、川村さんが外のことをもっぱらして、村松は評論家で忙しいし、実務は僕がひとり引き受けていました。ぼくが文学部に行ったのは六五年です。文部省に出した仏文のメンバーには最初から入っていましたが、それまで五年間一般教育にいたわけで、一般教育部の一番いやなところをさんざん見てきました。

そのころ立教では、一般教育部はひどく差別されていました。文学部の人が一般教育部長なんだからね。細入藤太郎さん（アメリカ文学。五五―六三年一般教育部長、六五―六七年文学部長）でしたが、彼は文学部教授

で、一般教育部長。一般教育部の教授会は一般教育部専任教員と一般教育に授業を持っている他の専門学部の教員で構成されていたわけです。だから、全然独立していない。しかも、細入さんが一般教育部長だから、英語の人が威張っているんだよね。要するに史学の連中とか、専門学部とつながりのある連中が幅をきかせている。とにかくフランス語の教師など、いつでも端っこに追いやられて、入学試験というと英語の採点か何かを端っここのほうで手伝いをさせられる。

僕は一般教育の一番差別されているいやなときに一般教育にいたので、驚きの連続だった。仏文というのは一番自由、伝統的に自由な学科として有名でしょ。そこで育った僕が、生まれてはじめて献杯をさせられた。つまり懇親会に行くでしょう。ずっと居並ぶわけよね。末席にいらのはいいよ。ただ、新任はいちいち一般教育部長のところへ行つて、腰を低くして献杯を受けるなんて、そんなことは生まれてはじめての経験でした。（笑）

万事そういう具合で、村松なんて背が高く、タツカリーの教授室で座つて足を組んでいると、確かに通るのに邪魔なぐらい長いんだよね。そうすると、これは故人ですが、英語の小さな先生が前を通ると、いつも引つ掛かりそうになるんだね。行儀が悪いと、彼は部長から注意された。行儀までいちいち干渉されるんだな。（笑）

そういうこともあって、仏文を作ったわけですよ。東大の仏文は実に自由なところで、お酒を飲むと、小林秀雄が辰野先生に「おい、辰野」と怒鳴りだすとか、そういう伝説があるように、無礼講の場所でしょう。研究室でもいつも教師と一緒にいたから、そういう雰囲気を立て教にもつくりたかった。

法学部は大学が言いだして作ったから、六号館を新築してくれたんだけど、仏文は何もいらないううから作ってやったんだと言われ、はじめ研究室は、一、二号館の一般教育部の中の仏語研究室をそのままにして、そこに雑居させられたんだよね。ただ、そこは学生の出入りを自由にしたので、今度はそれで一般教育部から文句が出るんだけど、学生がいつも入りこんでいた。当時の文学部の履修要項を見ると、英文などは「研究室に入ったら私語をしないこと」とか、そう書いてあるんだよ。

ところが、仏文の学生は、みんなそこで弁当を食べたりしている。二つの研究室の南のほうに教師は全部移って、北の空いたところで学生は自由にコーヒーも飲む。話がちょっと飛ぶけれども、紛争が始まったのはご存じのように仏文からで、そういう自由な空気だったから、そこから火を噴いて、周りから「仏文はあややって学生に勝手気ままにさせるから、ほれみろ。紛争が起

こつたじゃないか」と言われました。

もつとも、逆に紛争後に文学部の改革で何をしたか。僕が言い出して、学生読書室を各学科に作って、学生がそこで自由に自分たちの弁当を食べたり勉強したりする空間としました。これを第一に掲げたというのは、昔からの僕が育った環境に鑑みて、それこそ研究・教育の面でプラスになると思ったからこそ、それをしたわけですよ。そういう意味では、仏文はずいぶん白い目で見られて、いろいろ言われたけれども、紛争のおかげですべてが完全に平等になりました。

学園紛争は六九年でしょう。だから、それまでの五年か六年かは、何かというと仏文、独文は差別されていた。お前たちは「研究室も何もいりません」と言ったのだからと、予算を削られるわけよね。その代わり、僕が育つて非常によかった環境が、立教の中にもできた。僕は紛争を生き抜いて、昔からの僕の理念を持ち続けて最後まで来れたことはひそかに誇っているんですがね。

そういうふうにして、しかもお迎えしたのが渡辺一夫先生で、渡辺一夫さんというのは、大江健三郎くんが書いたものを見ても、戦争中のことを振り返っても、じつに自由で視野の広い方だったから、そういう雰囲気がある研究室を支配していたわけよね。だから、仏文のはじめのころの学生たちは、自分たちは渡辺一夫先生の弟子だっ

たというのを、みんな誇りにしていますよ、いまでも。

—— 大学としては、フランス文学科、ドイツ文学科ができるということに対して、大学側のメリットというのは感じていなかったんですか。

渡辺 なかったです。法学部ができればお金がもうかるよね。仏文は、作っても文学部の中で女子学生が増えるぐらいで、卒業しても当時、仏文出なからくに就職口もなかった。いまだ映画監督が出たとか、作家が出たとか、いろいろあるけれど、そのころはそんなものはない。だって、僕は戦後すぐの大学卒だけれども、親が小学校の昔の先生に会って、「子供は東大に行きました」「おめでとございます。どこへいらっやいました」「文学部です」「ええっ、許されたんですか」というのがふつうの感じですよ。(笑)

つまり昔から、文学部というのはそうだった。だいたい辰野先生は、新入生が入って来ると、「お前たち、仏文に来たからにはもう食えないと思え」と必ず言われた。教師になつて安月給で耐えるか、文士でどうにもならなくなるか、それが文学部であるという常識が、つい最近まであった。

—— 大学としてはそれほど仏文を作るのにメリットがないと考えて。

渡辺 ただ社会的名声ですな。つまり立派な先生を連れ

てきて、他の大学の文学部にはない学科を作ったという、そういうプレステージですよ。そういう意味ではプラスだったわけ。

—— でも、独文を作ったかった番匠谷さんは、最初から賛成されていたということですが、あとの松下総長をはじめとするような人たちは、最初はあまり賛成ではなかった。

渡辺 いや、松下さんもそのプレステージのほうは認めたのよ。ただ、予算面ではプラスにならないものを作つて、さらにお金を出すのはということでは渋つたから、紛争まで仏文はいつも差別待遇。文学部の中でも、予算配分のときに仏文と独文は図書費だって他学科にくらべて少ないのよ。それを耐え忍んだわけだ。(笑)

ただ、実際問題として、そうは言うけれども、戦後は第二外国語はドイツ語は減るけれども、フランス語はどんどん増えるわけ。だから教員は採らざるを得ない。そういうこともあって、文学部の定員は少ないけれども、一般教育のほうのフランス語の教師はどんどん増えていく。

そこで、東大でも駒場と本郷ではいろいろ差があったでしょう。だから、僕はその差がないようにしよう、一般教育部に来た人も仏文の教師としては同じに扱う、したがって、一般教育部の先生も、文学部の人と同じよう

に専門（科目）を持つ。全員におなじように持たせたのよ。にもかかわらず、教師の間から文句が出てくる。そもそも一般教育の教師が文学部の教師に対して文句を言ったのはじまりなのよ、仏文科内のごたごたは。最後には平等にローテーションを作って、文学部と一般教育部の教員を変わりばんこに入れ替えろなんていう意見まで出てきて、僕が「それは無理だ」と言ったようなことが紛争の発火点なんだ。

ところで話をもとにもどすと、仏文科創設には、それまでの文学部の教師も決して反対だったわけじゃない。

杉木喬さん（アメリカ文学。六一―六三年文学部長）は当時文学部長で、大賛成した。心ある人はみんな賛成してくれたけれども、心理とか、史学とか、キリスト教学科とか、そのへんがいろいろ文句をつけたのよ。杉木さんも細入さんも、英文はみんな賛成した。

——外国文学勢が増えるというか、バラエティができるといふことですね。

渡辺 そうそう。お互いにそのほうが勉強するにも非常にいいしね。

——ただ文部省としては、それまで文学系が英文科しかなければ、もうちよっと大陸系の文学を増やすようにとか、そういう指導は？

渡辺 文部省がうるさく言い出したのは紛争後よ。文部

省の介入は、私学助成金を出すようになってからですよ。それまでは余計なこととは言わない。あれは七〇何年かな。紛争の後だからね。助成金が出るまではそんなことはなかった。いまはさらにひどくなっているけれども、それまでは全くそういうことはなかった。大学の自立は尊重されていて、文部省の指導なんていうのはいないんだ。要するに専任教員が文学部に五人いて、その業績がしつかりあれば、それでごく簡単に学科新設は決まったのよ。

だから、僕は新学部をつくるので何度も文部省に行ったり、そういうことをその後させられたけれども、昔、仏文を作るのに文部省に行ったことはない。書類だけで全部すんじやつたわけだ。

——蔵書数の縛りぐらいですか。

渡辺 そうそう、それはあった。

——それは、前もつてある程度、一般教育というか、フランス語科時代の実績があったということですね。

渡辺 そうそう、それはけっこうあった。

——逆の意味で、規制が緩和されて、いまはまた簡単にできる時代になってしまいましたね。

渡辺 そういう意味ではね。ただ、緩和されたといつても、いまぐらい規程が強くなってくるとどうしようもない。要するに文部省のほうでいまはいろんな規程を作っ

て割り当て、例えばその年度に論文が何本出ると、いい大学^①になったり……。昔はカリキュラム改革でも、入試でも、われわれが先に立って論文入試だ、社会人入試だとわれわれの発想で改革をおこなったのに、いまは、膨大な研究費をいただくため、向こうさまがおっしゃることにすべて従わなければいけない。こういう大学が本当に大学なのかという気がしている。(笑)

大学紛争の前後

—— いまちように紛争のところまで詳しくお伺いしましたが、先ほどの仏文問題が発端だったわけですね。結局、一般教育部から仏文科への移籍が認められなかったということなんですが、先ほどおっしゃった中で、仏文科というのは非常にリベラルなところであった。学生も教員も平等でリベラルなところだった。ただ、この座談会〔「研究と教育の場としての立教―その歴史を語る」(二〇〇四年十二月、立教大学)〕の該当するところを読ませていただくと、そのあたりにおいては当時の仏文の古い教員の人はかなり権威主義的であったとも書かれています。

渡辺 仏文が権威主義的とは言っていないんじゃないの。そんなふうに取れるところがあつた？

—— そうか。文学部ですね。当時の文学部教授会は実

に保守的だということですね。

渡辺 そうそう。そういう意味では、仏文は文学部の中の異端者だった。

—— なるほど。そういう意味なんですね。

渡辺 要するに他の学科は、さつき一般教育の献杯の話をしたけれども、それほどではないにしろ、そういう空気というのは文学部にもあつた。これは何も立教のことばかりじゃなくて、要するに紛争の時期まで大学の中で最も自由でない、権威主義的な学部はどこかと言ったら、それは文学部と医学部なのよ。いまでもそうかな。だからこそ、東大紛争のときに、林文学部長〔健太郎〕が缶詰めにされて問題が起こったでしょう。ああいうことを学生がするぐらい権威主義的なものよ。東大でも、文学部の中で仏文というのは異端だったんだけれども、研究室で私語することができなかったというのは他の学科では普通だった。何も立教だけじゃないの。そういうふうに権威主義的だから、学科の壁というものがあつて、学科の中ではすべて権威主義的に秩序付けられている。

そういう学科の壁があるから、学科の外からでは中でやっていることは一切分らないわけよ。自分のところをやっていることは極秘で、そこで権威主義的にやっているから、それは表に出ないわけでしょう。たこつぽで

すから。そのたこつばが、紛争が起こつて破られた。

だから、教員は紛争になつても、何も知らない。他の学科のことは見て見ぬふりをしてきたから。学生から何か批判されても、学生に対して答えられないわけよ。学部として何をやっているんだと言われたら、「分かりません」と言うしかない。要するに文学部長というのは各学科の連絡役みたいなものなのね。学科の人事は学科で全部決めて出してきたのを、教授会はみんなただ判を押すだけなのよ。そんなでしたよ、紛争までは。

だからこそ、文学部は抜本的に改革が必要だったわけで、立教で文学部から紛争の火が噴いたのは、ある意味では当然なんで、文学部はあの紛争のおかげで、しかも若手が主導権を握つて乗り切つたから、最も自由なりべラルな学部生まれかわれた。日本中で一番リベラルな文学部になれたのはそこです。いまでも他の大学の文学部にはそういう遺制は残っている。やはり専門学というのは強いからね。学会とか、そういうものを基礎にした学科は強い。立教大学でも、それぞれの学科と立教大学のどちらに忠誠を尽くすかと問うた場合、二の足を踏む人が多かったんじゃないか。

だから、大学社会というのは難しいんだよね。山中くんなんて、長く職員をしてもそこまでは分からないだらうけれども、本当にどっちに忠節を尽くすかといっ

たら、大学でなくて学科に尽くす空気はいまでもあるんだよ。

——そういう話は、私なんかは独文系の先生方のエッセイではよく読みます。中島義道さんとか、桃山学院の高田里恵子さんとか。でも独文に限らず、文学部というところにはそういうことがあるわけですね。

渡辺 非常にある。そういう意味では、仏文はいい。本郷で辰野先生がいて、そういう自由の気風を作っちゃったから、仏文だけは不思議にそうなんだけれども、早稲田なんかは仏文でもずいぶん違う。むしろ東大系が一番自由かもしれない。といつても、だんだん違つてきているね。

ことに僕なんかは立教紛争を経ているでしょう。紛争を経た世代はそのまま来ているけれども、その後の世代、紛争を知らない人となると、そういう悪い流行性の病気がうつつてきているんだな。(笑) そういう感じがするね。

——私の印象ですと、紛争後は立教にも国立大学を経て移つてこられた文学系の先生も多くていらつしやつて、かなり雰囲気が違う。悪くいうと権威主義的な印象を受けます。

渡辺 そうかなあ。死んだ仏文の平井啓之さんなどは、要するに駒場の紛争で東大に辞表を出して、それを引っ

張つてきたわけだけれども、彼は本当に立教が好きだったね。そういう意味では、立教を好きになった人は非常に多い。教育の寺崎さん〔昌男。教育史〕だって立教が好きだし、西田幾多郎の孫の上田薫さん〔教育哲学〕とか、あのへんは皆さん立教に来て、立教が好きになったよね。だから、国立大学から来てもその素地によって違うんだよね。ああいうふうには私立大学に移って、そこが本当に好きになる人がいるというのは、立教の特色じゃないの。普通は定年後の腰掛けでいるだけというのがおおいけれども。

——そうすると、先生方のご努力で、文学部の紛争前と紛争後というのはまるつきり違った学部になったと言いうことができるわけですね。

渡辺 そうそう。だから、権威主義的な先生はみんな辞めざるを得なかったのよね。文学部で紛争後に辞表を出した人は多いでしょう。法学部もそうよね。だから結局、ここに骨を埋めて自分たちの好きな大学を作ろうという人だけが残った。若い人だけが残ってしまった。

それまでは学部長はみんな五〇代後半ぐらいにならないとなれなかったのが、紛争のとき松浦高嶺さん〔イギリス史。六九―七〇年文学部長代理、七三―七五年文学部長〕が四〇代半ばだったし、僕が学部長になったのはまだ四〇代終わりじゃないかな。

——紛争を通じて非常にたくさんの方が辞められていった。それは権威主義的だからいられなくなつたというお話ですが、もう少し具体的にお話しただけですか。

渡辺 いろいろな人によって違うけれども、文学部の場合には、大衆団交であれだけ学生にいじめられて、その学生と一緒にやっていくのはいやだという人が多かつたわけよね。だから、権威主義的というより、むしろそっちのほうが多かつた。ただ、いままで威張っていたから、そうなるわけよ。僕らは、教壇の上であろうと下であろうと、教師は学生の相手をしなければいけないというのが信念で、紛争だからああやって大衆団交もやった。二八時間団交という国際記録まで作ったのはそれがあるからだよ。

でも、その後もずっといた人でも、僕が驚いたのは、ある先生が亡くなられ遺稿集みたいなものが遺族から送られてきて、それを見ると教授会に行くのがいやだという日記がずっと書いてあるのよ。つまり雰囲気がいやだというわけ。それを忍んで定年までおられた方もけっこういるんだなとつくづく思ったね。僕らみたいな若手がうるさく言うし、いやだったんだらうなと、いまになつて分らないわけじゃないけれども、あの時代はそうじゃなければやっていけなかつたんだ。

—— 立教の中で紛争の前と後で一番劇的に変わったと私たちが後から見て思うのは、やはり文学部で、さまざまな制度が変わった。カリキュラムが変わり、入試制度を大きく手直した。その他に、先生からご覧になって何が変わったと思われますか。

渡辺 そういう意味では、いま僕は非常に残念なの。学生研究室をわれわれは非常に大事にした。個人の研究室を全部廃止して、教師は雑居でも、学生にはちゃんと自分たちが勉強する空間を与える。これをやってきたのに、僕が辞めたとたんにでんぐり返しじゃない。いまやみんな個人研究室を持っていて、学生は行く場所がない。前は学科の研究室というのがあって、そこには助手がいて、みんなそこでいろいろな相談もできた。いまは居場所がない。大学院の学生も居場所がない。先生は個室でがんばっている。話に行こうと思っても、行きにくくてしょうがない。

いま僕にとって一番ショックなのは、僕の理念というか、僕の生まれ育ったところ、大昔の東京帝国大学フランス文学科以来の僕の教育、研究の場だったあの研究室制度が、なし崩しになくなってしまったこと。しかも、それに誰も文句を言わないで満足しているいまの文学部に対しては、非常に不満だということが言えるね。いまの学生がおとなしいのは、そういう学生同士で語り、問

題を出してくる場がなくなったこともあるんだよ。

確かに仏文で紛争が起きましたよ。いまになって考えれば、やつらは研究室で謀議していた。でも、そういう場があればこそ、学生も生き生きと学生時代が過ごせる。部活動ばかりではなく、すぐ部室に行ったりするのはなくて、それができたと思うんだよね、教育・研究的な雰囲気のおかげ。それができなくなったでしょう。立教の文学部でさえそれがなくなった以上、日本中でそれがなくなっちゃったわけだ。そういう意味では、ますますいまの大学に対して不満なんだな。

例えば文学部の集中合同講義というのを知っているでしょう。要するに学科をこえて専門を異にする五人の教師が一つの共通テーマを決めて、池袋で準備の授業を五人でしたあと学生と一緒に八王子のセミナーハウスに行き、四泊五日で一年分の単位をやるんだけど、ともかく朝九時から夜中まで授業をずっと続けて、教師の講義に他の教師も出席する。そして、学生と一緒に質問をして、担当教師をいじめながらやる。

まずテキストを読む。それから演習、それから講義と、この三つをやる。五人でしょう。十五コマあるわけよ。それを助手まで入れてやる。学生も教師もおたがいにくら批判してもいいのよ。しかも、みんなでさまざまな角度から一つのテーマを論じて結論をつくりだす。

実はこの方式を言い出したのは塚田さん〔理。組織神学。七五―七九年、九〇―九四年文学部長。九四―九八年総長〕なんだよね。彼はこれをオックスフォード大学から持ってきた。

これをやりはじめたのは七五年です。八王子の最初の合宿が大場事件と同じ頃だったんだけど、この年から始めた。はじめ立教大学は予算がないからと言ってお金を出さなかった。宿泊費も自腹を切って、われわれは手弁当でやった。一〇年たつてやっと予算がついた。だから、僕らは身を粉にして学校のために、お金をもらわなくても、したいことをやったわけだ。だいたいさまざまな学科の学生が三〇人か四〇人でしょう。それで四泊五日やる。だから、そこらいい学生が出ているの。それに一番熱心だったのが前田愛さん〔日本近世・近代文学〕だった。僕と塚田さん、速水さん〔敏彦。新約聖書学。七三―七五年学生部長。八五―八九年文学部長〕あたりも大好きだった。

そこにきた学生はその後、北大へ教師で行ったり何かしたのはみんなそこにいた連中だったし、いま映画監督をしている周防くん〔正行〕も、いま法政大学で教えている温泉学の岡村くん〔民夫。フランス思想、表象文化論〕なんかも、そのグループだった。教師ががんばってやっているところはいい学生が出るんだよね。それだっ

てもう、止めちゃったでしょう。

そういう意味では、はつきりいって、立教大学の全盛期は七〇年代から九〇年前後までだと思う。この時期に紛争後のそういういろんなものがいっぺんに開花した。法学部には神島二郎さん〔日本政治思想史。七三―七五年法学部長〕、野村浩一さん〔東洋政治思想史。七七―七九年法学部長〕、それから高嶋通敏さん〔政治学。八五―八七年法学部長〕がいたでしょう。文学部には前田愛さんがいたでしょう。塚田さんがいたでしょう。僕がいたでしょう。速水さんがいたでしょう。寺崎さんだつて室さん〔俊司。社会教育学。七五―七八年総長室長、八九―九〇年文学部長。〕だつていたわけでしょう。そういう、学生が好きで、本当に学校のためにつくした、しかも一流の学者が揃っていた。そういう人がいると、大学はやはりよくなる。

だから、あのころは国際シンポジウムなんてちゃんとしたものをやったのは、立教がはじめてだね。大江健三郎を呼んだし、その後有名になった評論家の加藤典洋も来た。鶴見俊輔だつて松本健一だつて来たし、ともかくそういうのを全部集めて、高嶋さんがシカゴのナジタさんやミヨシさんなんかを呼んだ。あれはあとで岩波で本になって大きな反響を呼んだ〔戦後日本の精神史…その再検討〕。

——八五年の「立教国際シンポジウム」ですね。

渡辺 そうそう。自分のことを言うけれども、ミシェル・ビュートルを呼んで「フランスの前衛小説家。八九年国際学術交流招聘研究員」、西武で彼の美術作品の展覧会までやって、西武のビルの正面に「立教大学招聘のビュートルの展覧会」と大きな垂れ幕が下がっていましたね。君の後ろにあるけれども、そのときビュートルが「池袋駅」という詩を書いて僕に贈ってくれたのがその額です。(笑)

——これはどこかに発表されているんですか。

渡辺 いや、ない。

——それはすごいですね。

渡辺 ビュートルも非常に立教が気に入って、最後に僕にこの詩を書いて、お礼だとくれたんです。そうだよ。これは立教の宣伝になるよね。

——全然知りませんでした。すごいですね。

渡辺 あのころはそういう高度に知的な雰囲気があった。さつき法政大学は三木清がいて、昭和のはじめは哲学というと法政大学だった、昭和一〇年代は明治大学だった、と言ったけれども、立教大学の全盛期は、非常に財政的に苦しくて一番赤字のときだったけれども、七〇年から八〇年代だよ。あと経済学部には住谷一彦さん(「経済社会学。七七一七九年経済学部長」)がいたし、

いろんな名士がそろっていたのよ。いわば日本の学問の第一線で活躍している人は、みんな立教にいたんだもの。しかも、その特徴は、そういう人がながく立教にとどまって、立教が好きで、立教のために国際シンポジウムとか、あらゆるものをやった。そういう時代だったんだ。

紛争から一〇年苦しんだけれども、その成果というのは七〇年代、八〇年代に花開いたわけよね。財政的に苦しくなくなったのは、そういう華やかな時代が終わったときで、財政的に苦しくなくなったら、今度は文部省の統制でどんどんいいところが消えていく。学生研究室もなくなるし。難しいんだね。

——先生がそろわなければ駄目だということですね。

渡辺 そう。本当は人事なんだよ。だから、文学部は紛争の後に何をしたか。人事審査を非常に厳しくした。この学部よりも厳しく、しかもそれまで学科本位だったのを、当該学科以外の委員を大幅に増やして、学部には人事委員会を作り、そこで全員で討論して決めるという非常に厳しい規定を作った。だから、いい人がそろったと威張れるね。いままでもみたいに学科の親分・子分関係など全くなくなかった。

途中で辞めたけれども、青木保さん(「文化人類学」とか、いま有名になっている人はみんなそうやって就職し

ています。あとでよそへ移っても、その時点で最も優秀な人をとるのが大事なんだ。法学部だけど、国連の大使になった北岡くん（伸一、日本政治史）なんて立教に長かったし、若いときには八王子の集中合同講義にも来てくれていたんだよね。蓮實重彦くんだって仏文にいたんだから。いつてみれば、立教の息がからなかった立派な学者はいなかったとまで言えるんだよね。

——八〇年代ころの印象では、かなり業績のおありになる先生でも立教にお見えになると業績がご不振になることがある。大変失礼ながらそんな印象を持ったんですか。

渡辺 学校が忙しかったのは確かだ。ただ、僕に言わせれば、僕と比べてくれと言いたいね。紛争以後、全共闘やそれ系統の学生は僕がもっぱら相手をしていった。いまだから言うけれども、夜中に電話がかかってくるんだよ。タツカーを封鎖したとき（学費）値上げを反対する会だったかな。あのときは実はタツカー封鎖をやめると僕は個人的に説得していた。

そうすると夜中に電話がかかってくる。車で出ていって池袋あたりで会って、どうしても封鎖までせざるを得ない、「封鎖は二日でやめるか」「やめます。その代わり値上げを撤回してください」と言うんだ。七四年に大騒ぎになったでしょう。あのときは前の日に封鎖して、翌

日に佃総長（正晃。六九―七二年理学科長、七二―七五年総長）がタツカーで「学費反対」と集中攻撃されたでしょう。あのあと撤退した。僕がちゃんとお膳立てをしたんだよ。

——そうだったんですか。

渡辺 いまだから言える。はじめて言うんだよ。

——一九七四年は私が入学した年で、最初は高い学費を言われていたのが、それよりうんと安く払うことになって、助かったんです。

渡辺 あれは、松浦さんが佃さんを説得して、佃さんのオーケーを取った。そのころ僕は学生には人気があったので、僕は全共闘の学生と話を通じるわけよ。だから、呼び出して、やつらはやるところまでやると言うから、学費値上げは撤回する、そのかわり封鎖は一日だけは認めると説得した。僕らはさんざんあとで職員から文句を言われた。タツカーの中で机をひっくり返されて被害甚大だね。

それで僕は「朝日ジャーナル」に匿名で書いた。立教はちゃんと学費撤回を認めて、学生を説得して学生は退いたじゃないか。そういつて、すぐ機動隊を入れる他の大学は批判したけれども。でも、それだけのことを立教はやった。はつきりいうと、僕と高嶋さんは紛争から後、ずっといつもそれをやっていたの。ことに尾形さん

〔典男。欧州政治思想史。六七一六九年法学部長、六九一七〇年総長室長、七五―八二年総長〕が何かというかわれわれ二人に頼むのよ。

——そんな感じは聞いておりました。

渡辺 職員でも少数のそういう人がいて、尾形さんのときには秘密のアジトがあった。僕なんかいつ研究をしたか。だって、夜はそういうところに引つ張り出されるのよ。教授会でもカリキュラムや何かを全部やっているんだよ。でも、自分でちゃんと著書も書いていたし、仕事もしているのよ。

——そうですよね。

渡辺 そうよ。ちゃんと本だって出しているでしょう。いまだって出している。

——つい最近もまた出していらっしやる。

渡辺 だから、学校が忙しいからと言っても、僕は聞く耳を持たないんだな。本人のやる気いかなだと思っただよ。

——やはりそういう中で先生方は研究なさっていたんですものね。

渡辺 そうそう。あのころは、経済学部〔当時三号館、タッカー〕と文学部〔六号館〕は真ん中に、立教通りをはさんでいて、たがいに川向こうと言っていたのよね。ハト派の法学部〔六号館〕と文学部の教師が川向こ

うへ行くとか大変だといわれるぐらいだった。七〇年代はそうだったのよ。

だから、余計な話ばかりするけれども、ぼくが学部長に選ばれたのは八一年です。僕が学部長になった翌年から活動学生が出てこなくなりました。僕の前の学部長は濱田さん〔陽太郎。七九―八一年文学部長、八六―九四年総長〕で、入試の前日に半日間六号館の一部の占拠があった。そういうこともあって、四〇代で学部長になった。要するに体力もある人じゃないと学部長は務まらないということもあったのよ。それで僕が学部長に選ばれた。

そうしたら経済学部は、それまでは他の候補を考えていたのに、山田耕之介〔近代経済学。八一―八三年経済学部長〕が紛争のころ組合の委員長をしていて、僕が組合を脱退すると言って大論争をしたことがあって、僕に強いと経済学部は思い込んでいたんだよね。それで山田耕之介を僕にぶつけて、僕が学部長になったとき経済学部長は山田さんなんだよ。

ところが、意外に話をすると仲良くなって、そのため僕は塚田さんや松浦さんに文句をいわれたんだけど、話せばおたがいに分かるんだよ。そういう意味で、僕は経済とも仲がよかった。逆井孝仁さん〔日本経済史。七三―七五年経済学部長〕とも親しかった。だか

ら、七〇年代も終わりになると、僕はどの学部とも仲がよくて、しかも他学部にも優秀な人がいることがよくわかった。

これ（『研究と教育の場としても立教——その歴史を語る』）を作るときも、理学部は、原子物理学者で出席を頼んだときも具合が悪くて、すぐ亡くなってしまわれたけれども、小川岩雄さんを考えていたんだよ。小川さんは映画も好きで、僕とよく映画の話をしたり、そういう知的なものに満ちあふれていて、学部を超えて仲がよかった。立教のあのころはある意味では知的なユートピアというようなもので、だからいろいろな学部の人を入れて国際シンポジウムもできる、そういう雰囲気があったよ。

そのころの立教というのは、財政的には苦しくて、僕はいよく立教大学を筑摩書房にたとえたりしていたね。筑摩書房というのは、社員の給料は非常にいいのよ。良書を非常にたくさん出すのね。でも、財政的に具合が悪くて、七〇年代の終わりに倒産したでしょう。立教は筑摩書房みたいなものだ。ずっと倒産寸前で来た。ただ、倒産寸前でなくなった途端に、知的なほうはだいぶお粗末になったという気がするんだけど。

——耳の痛いお話です。いまの話伺っていると、教師がいいというのは、単にその人が研究的に優秀という

こともあるのでしょうか、それ以上に立教大学という場において主体的にものを考えられる人間ということですよ。結局それがうまく具合に回って、立教は紛争を乗り切ることができた。教職員間のお互いの信頼感も高まっていったということだと思っんです。私が以前いた青山学院と比較しても、興味深いと思いました。

渡辺 大事なのは、立教大学はアングリカンであること。アングリカンというのはある意味ではヌエ的な存在なのよ。カトリックでもないし、プロテスタントでもない。ただ、立教大学のアングリカンの特質は、寛容の精神です。その反対の極端な例がカトリックの上智だよ。立教のよさは寛容さ、寛大さですよ。本当に懐が深いんだよ。

大須賀さん（潔。キリスト教哲学。六七年一般教育部長、六七—七〇年総長）とか、速水さんとか、塚田さんとか、あのへんの世代の偉さなのも分からないけれども、紛争で立教をアングリカンが支えたのは、彼らの懐の深さのおかげです。

だから、国家権力には盲従しない。何を言われようと、自分の持ち味で生き抜く。そういう学風があったということが、青学との違いです。青学はすぐ機動隊を入れた。ああいう問題は立教では起きない。

そういう意味では、紛争中の立教を背負った大須賀さ

んの懐の深さというのは、あまり人は言わないけれども、認めていいんじゃないかな。総長室長だった尾形さんがよく補佐したこともあるけれども。六九年の暮れ、十二月の二十何日かの東京新聞の夕刊に、紛争でベタベタ貼紙をされている六号館のうらぶれた写真が出ていて、「まだ都内で封鎖が残っている唯一の大学」とキャプションがあつて、その一週間後にわれわれは、討ち入り^グを果たした。

しかも、討ち入りのときだって、尾形さんが言い出して、われわれが出かけて行くときにはちゃんと尾形さんから大須賀さんまで来ていて、学院でお弁当を作ったりして僕らを支援してくれたわけだ。そういう体質だね。

——紛争のときに大須賀総長だったということがかなり大きいということですね。

渡辺 大きい。

——それはかなり大きかったような気がしますね、これは仮定の話で、昭和三〇年代からずっと松下総長で、かなり長期政権を敷いていた。都知事選に出るからとその直前に大須賀総長に代わっていきましたが、辞めていなくて松下総長だったらどうなったと思いますか。

渡辺 駄目だね。それは自民党と同じだよ。大須賀さんだったから本当によかった。大須賀さんという人は、昔さんとか、キリスト教学科の主流からは非常に白眼視さ

れていた人です。だから、傍系だったのよ。大須賀さんは同じ研究室だったことがあるんだよ。最初にタツカーに研究室があつたときは、一般教育部で雑居でしょう。大須賀さんまで同じ部屋だもの。そういう意味では、それまで大須賀さんは影が薄かつたけれども、前が松下さんだからね。でも、大須賀さんは立派だったよ。

ただ、松下さんも、法学部を作つたのは、その後の立教にとつて非常によかつた。つまり法学部の人たちは、宮沢さんをはじめ、本当にリベラル派だった。そういう意味で買つていい。法学部と仏文を作つたから、紛争のときに乗り切れたとも言えるんだよ。(笑) だって、ハト派はそのへんが主じゃないの。

ただ、宮沢さんとか、あの世代は、紛争のとき尾形さんあたりに批判的だったらしいね。だから、紛争中最後には出てこなくなつたでしょう。法学部といつても、世代の問題もあるんだよ。戦中・戦後派が主導権を握つたというところが、また大きなことじゃなかったかな。やはり宮沢さんたちはそれ以前の世代だからね。あの世代であの時期珍しくリベラルをつらぬいたのは渡辺一夫先生だけだったかもしれない。

——もう一つ青山との比較でちよつと思ひ出すことがあるんですが、立教の紛争の中で理事会とか理事長という言葉や勢力、力があまり出てこないというところが、

立教の一つの特徴ではないかと思うんです。

渡辺 そう。立教の私学としていいところは、理事会が全く弱いことです。(笑) 要するに卒業式、入学式で顔を見るだけで、これは他の大学と違って、理事会が介入しないで大学の自治を全面的に認めた。ある意味では立教大学はそれこそルネサンス時代のパリのソルボンヌとか、ポロニーヤ大学とか、そういうものにつながる自由の、本当に精神共同体だったんだな。

——先ほど松下さんが総長だったら、紛争のときは駄目だったとお話しされました。たぶんそうだったと思うんですが、いま出てきた理事会が弱くて大学の力が強いというシステムを作り上げたのは、たぶん松下さんだと思っただけですね。そのあたりはかなり入り組んでいるとは思いません。

渡辺 歴史というのは難しいんだよ。(笑) だから、一面的には切れないんだ。戦後から見ると、例えば戦争中の立教大学というのはやはりいろいろ問題があるんだよね。キリスト教についてもね。戦後すぐでも、アメリカカトリックの細入さんがいて立教の一般教育部なんて先駆的な存在だったんだけれども、それがどこまで実質があったのか。でも、時代ということもあるし、その担い手がどの世代だったかということも大きいし、いろんな問題があるんだらうね。

——紛争の対学生の窓口のようなかたちで先生が活躍されていた時期に、大学に対して理事会からの干渉とか、あるいは理事会の動きとか、一切お感じにならなかったんですか。

渡辺 何もない。総長がウンと言えばよかった。尾形さんのときも、佃さんのときも、よかった。佃さんの次は誰だったかな。

——佃さんの後が尾形先生です。

渡辺 そうだ。尾形さんの最後の時期に僕が学部長だった。大須賀さん以後はそういうものが脈々と保たれてきたね。その間に平井さん「隆太郎。社会学。七〇―七一年総長事務取扱」がいたけれども、完全に僕に近い人たちがずっとやってきたからね。

——いい時代でしたね。

渡辺 ええ。尾形さんの後が高橋健人さん「数学。七〇―七三年、七五―八三年一般教育部長、八三―八六年総長」で、事実上僕が補佐していたわけだ。その後、濱田さん(陽太郎。教育社会学。七九―八一年文学部長、八六―九四年総長)がちょっと違うけれども、濱田さんだっけって大きく違ったわけじゃないし、守るもののはっきり守ってきたし、その後は塚田さんかな、ある意味では大須賀さんからその伝統はずっとつながっていると言えるね。

——そうかもしれないですね。近年の大学はいかがでしょうか。

渡辺 近年は何が悪いといって、完全に文科省の力が弱くなって、大学はどこも言うことを聞かざるを得なくなったところがある。非常に大きいね。何よりもそれだ。そういう大学行政に抵抗することができない。結局、私学助成金と科研だよ。これに縛られている。だから、敵は巧妙なんだよね。要するに自民党政権が作ったものに完全にしてやられた。それまでの立教大学は、国際的にも高く評価される自主的な大学だったけれども、いまやどこに自由があるのだろうか。

しかも立教がよかったのは理事会が弱いから、本当に精神共同体でいられたわけよ。その代わり理事会は大変だったと思うの。だからいつも貧乏で、それはしようがなかったんだけれども。

——理事会はご関心がなかったのか、あるいは関与するのが怖かったのか。当時どういう雰囲気だったのでしょうか。

渡辺 これもやはり聖公会なんだよな。だから、口出ししないで、何とかやっていけばいい。積極的に黒字にしようと思ったり、他大学みたいに株を買って何かここでしようとか、いまだってそれはしないでしょ。ある意味では立教の体質だよ。

——ちょっと戻りますが、紛争のときに大須賀総長で一番よかったというか、どんな点でしょうか。

渡辺 彼はばか正直みたいに学生との話し合いを繰り返してはいた。何があっても学生というものとは敵対してはいけない。だから、機動隊なんてとんでもない。彼は最後までウンと言わなかった。だから、なぜ討ち入りをしたかという、あの直前に大学立法はできるし、他の大学は全部紛争を解決していく。経済、理学部（当時四号館）、それに社会学部（同二号館）まで入って、川向こうは全部機動隊を入れると言いつつ出したのよ。職員にもその空気が強い。

実は討ち入りの前に職員と教員の有志で暮れに池袋に集まったとき、そこにきた職員の中でも大部分は「もうしようがない」と言っていた。本当に討ち入りをしたのは教職員の中のごく少数派なのよ。

——そうだったんですか。

渡辺 そうよ。だから、学生部の石井くん（秀夫。職員。九六―九七年広報渉外部長）とか甲藤くん（善彦。職員。九二―九四年就職部長）とか、そのへんと文学部と法学部の教員のごくわずかの有志でしょう。他は大反対なんだ。だから、僕は学内機動隊だとさんざん悪口を言われたんだから。

ついでに一言いうと、いま思い出したんだけど、

教職員の有志が集まる前に、十二月のクリスマスマスの後かな、何かで集まったときに、尾形さんが「いまから六号館に行こう」と言い出して、尾形さんが先頭になって走って、教員の有志がついていって、六号館の前まで行ったのよ。ところが撃退されたということがあった。その後に夜の集会があって、一月三日ということになったのよね。

——それは十二月二十五日ですか。その後、一月になった。

渡辺 だから、本当にいろいろあった。われわれが六号館に入ったあとも、奪回されないように一カ月泊り込んでいたんだからね。その後、神島さんが出した評論集を見ると、最後に紛争のことを書いているのよ。全然そんなことはなかったんだけど、神島さんは自分が部長だったと信じているんだよね。それを讀むと、自分が部長で、小隊長は高畠と渡辺だったと書いてある。(笑)

そのときも、こつちにちゃんと見張りがいて、前の日にどこかその近くで見ている、三日は中にいるのは一〇人以下である。一〇人以上だったら行かないことになっていたのよ。いま五人ですと言うから、それでわれわれは決行したんだけど、行ってみたら何のことはない一五人だった。(笑)

——ヘルメットを用意されたと聞きました。

渡辺 そうよ。ヘルメットをかぶって鉄棒を持って、向こうと同じ武装だよ。だから、われわれが近づいていたら、「革マルだ」と向こうが叫んで、蛍光灯を投げた。これはすごいね。ぶつかるとバーツと割れて破片が四散する。背中にガラスの粉が入って、僕はオーバーを一着駄目にしちゃった。あの日は本当に大変だったよ。しかも、中に入ってみたら余計にいるしね。六号館の下からバリケードをはずして少しづつ押し上げていくのね。四階まで行って、最後に高畠さんが説得して武装解除させた。

でも、最後、十何人が残っていたんだけど、われわれがやっている間に、頼まないのに機動隊が立教の周りをぐるっと取り巻いている。学生が構内から出て行くともんな捕まるわけよ。われわれは学生に機動隊を使つたと言われたくない。どうしたかという、僕と高畠さんが自家用車で来ていた。二人の車に彼らに乗せて、池袋の駅で放したら捕まるということで、江古田と中井にした。僕は中井で、高畠さんは江古田まで学生を連れていって、電車賃をわたしてそこで解放した。いろいろあったよね。

——先ほど紛争のときにいろいろな先生が辞めていった人が多かったというお話がありました。その中で村

松さんは辞めたのか、辞めさせられたのか。

渡辺 村松剛と一緒に仏文を作ろうということで僕を立教に連れてきた。文学部の中でゴタゴタがあったとき、いつも一緒にやってきた。渡辺（一夫）、杉が辞めた後、その欠員が埋まらなかった。というのは、一般教育部の連中が、あきを埋めるために定員をグルグル回せと言うわけ。それは無理だと言って対立していたわけよ。仏文はそのとき、なんと川村、村松、渡辺のたった三人であとの一〇人を相手にするわけ。まだ杉さんが残っていたんだけれども、杉先生というのはある意味では優柔不断で、会議でも絶対に何も言わないんだよ。

もう分かるでしょう。村松は弁がたつけれども、忙しい。結局、僕一人が相手なのよね。僕に対する集中攻撃で、村松はいつも付き合ってくれていたけど、まだ決まらないときに文学部の教授会の日が迫ってきて、最後は多数決だから、飲まざるを得ないというわけ。「一般教育部の」二名を「仏文へ」移籍にする。ただし将来のグルグル回しが前提である。表に出ないけれども、そういう前提がついていた。

—— そうなんですか。

渡辺 ゴタゴタしているという情報はいくら秘密にしたって漏れますよね。そのうえ、人事審議の文学部教授会は、一回目のとき提案と説明があつて、その次の会議

で投票なんだ。ところが投票の前の日に、高橋くん（武智）はベ平連の一斉取締りで家宅捜査を受けた。新聞に出るのは翌日でしょう。途端に票が見る見る減つていつて、三分の二に達しないわけ。新倉くん（俊一）もその影響を受けてだめだった。

—— グルグル回しというのは、一般教育部と文学部で一定の年限で人を入れ替えていくということですか。

渡辺 公には一切しないよ。学科内で内規としてそのつもりでいろ、という条件なのよ。

—— 文学部側は、それは無理だと。

渡辺 無理だと同時に、外に対してだってそんなことは説明できませんよね、はっきりいって。三人がそのままいるのが当然だと思っていたし。しかし向こうは若いしね。そういう意味で納得はいかなかった。ところがそれで教授会で人事が否決されたでしょう。そうしたら一般教育部のフランス語教員全員、文学部への出講を拒否した。さてどうするか。三人は文学部の教員だから学科の責任をすべて負っている。どうするか。そこで三人で非常勤をかき集めて十数コマの穴埋めをして、カリキュラムも四月には印刷が間に合わないから、すでに刷り上がったものに黒々と墨を塗って氏名を消さざるを得ないじゃないの。

—— それははじめて聞きました。

渡辺 言わないもの。(笑) 僕も年を取ったし、周りが故人になっていくし、それにこういうことが謎のままというのはいくはない。

—— 結局、どのあたりが問題なのかというのはいくら読んでよく分からなかったんです。

渡辺 僕らは二人の移籍に反対じゃなかったけれども、ともかくあの附帯条件と、そして文学部教授会のあとの、仏語教員全員の出講拒否はほんとうにショックだった。

—— 独文のほうにはそういう火種はなかったんですか。
渡辺 なかったんだね。同時に、あつちは一般教育部にいた立川さん〔洋三〕が偉かったんだ。あの人が偉くて、自分は一般教育部にとどまって、文学部に福田宏年をやったり、そういうことをしたのよ。

—— そうですね。でも、福田先生はお辞めになっていく。

渡辺 そう。その時の文学部の独文が全員辞めた。轡田〔収〕くんも辞めた。だから、そつちもまた問題があるんだよ。紛争を書いた立川さんの小説というのがあるよ。

—— 私は読んでいないんですが、あるみたいですね。

渡辺 あるんだよ。それを読むとよく分かるけれども、立川さんは偉かった。彼が文学部に行かなかったからこ

そ独文ではそういう問題が起らなかった。

あの人は偉い人だよ。僕は高く買っているんだ。だから、いまでも仲がよくて、小説を送ってきて、雑誌「立教」で書評までさせられる。(笑)

—— 村松先生の問題は？

渡辺 すぐ話が飛んですみません。村松とは、最後まで一緒にやっただよ。大衆団交だって、最初の文学部集会までは彼も出てきてくれた。僕は村松を大事にしていたし、学者としては立教で教えていて看板でもある。ただ、彼も出席したけれども、タッカー・ホルルの壇上に立ったとき、たぶん彼は自分の将来を考えたんだ。評論家としてテレビにもいろいろ出ているタレントでしょう。それでふつりともう出てこなくなった。

そこにまた三島由紀夫とかが干渉したので、変な声明を出して、そこで今度は学生のほうが村松の「慰霊祭」などをタッカー・ホールで挙行了。だから、辞表を出して、大衆団交で「それを文学部教授会は認めるのか」というようなことを学生に問われて、やむを得ず解雇処分になったのかな。要するに退職は認めないけれども、辞表を出したんだからやむを得ないということ、文学部は承認したと思うよ。学院として解雇にはしていないんじゃないかと思うけれども。

—— はい。最終的にはギリギリのところではない

んです。

渡辺 そうでしょう。学院も聖公会だから、それはちゃんと心得ているんだよね。ただ、要するに大衆団交の席上では、それで紛糾するのはいやだから、「辞表は」認めないということにしたけれども。だから、そういう意味で彼は僕らを恨んでいたと思う。

渡辺一夫先生が亡くなったときに、渡辺さんの残した本を弟子たちに分けてくれという遺言で、執行人の一人に僕が指名されていて、紛争後始めて村松に電話をした。彼は参加をことわったけれども、あのことがあって以後、立教だけではなくて、仏文関係からも離れてしまったよね。その後だいたいぶたつてからもう一度会ったけれども。

はつきりいつて、川村さんは温厚な方だけど、あてにならないのよ。結局、村松をいつもあてにしていたけれども、村松が出てこないから、それ以後僕が孤軍奮闘。ひどかったのは、大衆団交のとき仏文科は二名、川村さんは途中で具合が悪くなって休んで、仏文科代表は一名なんだよね。(笑)ほんとに一人で背負って立ったようなものだね。そういう裏の裏まで分からないと納得いかないだろうけれども。

——そういう話ははじめて聞きました。

新学部設置の構想

——もうだいたい時間が長くなりましたので、紛争のことから後のことに話を変えさせていたかと思えます。一九九二年に新学部の設置準備室ができて、それが一回なくなつて、もう一回、新学部設置準備本部というのができて、退職の前年までその職にいらつしゃいしましたが、なくなつてしまったというのはどういふことでしょうか。

渡辺 僕は年を覚えていないんだけど、濱田さんのときに新学部準備室というのができたんだよね。そのときにそれを頼まれた。そのときにも僕は文部省に行っているんだよね。それは国際文化学部だった。僕の夢はじつは最初の国際文化学部にあった。濱田さんに言われて、その気になって、いまだから言うけれども、ちゃんと説得して、東大総長になる前の蓮實〔重彦〕くんの本番としての内諾までちゃんと取つてあったんだよね。

あと、その後仏文を離れてしまった宇野邦一くん〔フランス文学・哲学〕とか、前田くん〔英樹。言語哲学、映像哲学〕とか、野谷文昭くん〔ラテン文学〕とか、そういう人たちも入れて、表象というようなことを看板に国際文化学部というものを考えていた。

——それは随分とおもしろそうな学部ですね。

渡辺 そうよ。実は全部プランは出来上がったけれども、問題は文部省にあった。文部省が「国際はもう」というようなことを言っていて、あまり色よい返事をしない。それでも僕は何回も出かけて、後のときよりもそのときのほうがずっと熱心だった。あのときは誰が一緒に行ったのかな。もう忘れちゃったな。前に立教を出た課長補佐が文部省にいたんだな。そのときに、朝早く起きて文部省に通って、濱田さんに報告したり何かしたりして、そのときはおもしろかったんだよ。ただ、文部省のその課長補佐のほうから「内意」というのが来て、「いまは国際はもう」ということで、それであきらめさせられたんだな。

それが尾を引いていて、その後になつて福祉絡みで国際をやるうというような話が出てきたんだよ。それで観光と福祉が出てきて、その福祉のほうに実は国際的なものを入れると言つて、塚田さんに頼まれて、前の経験もあるからと。結局、文部省と話をしている間に、国際のほうは考えているようにはいかない。福祉一本になつてしまつて。

あのころその問題をやっていた人、だれだったかな。みんな名前を忘れてしまった。観光は、だれだったかな。最初の観光学部長は誰だったかな。

——岡本先生〔伸之。観光経営論〕ですね。

渡辺 岡本くんが観光で、こつちは、誰だったかな〔関正勝氏〕。いろいろあつたんだけど。こつちの方は福祉を入れたので、観光と福祉であまり問題ない。文部省からもしじめられないで、二回か三回行つただけで、サツと通つたんだよ。国際のときは、いい人事だし、ずっとそのほうがおもしろいと思つたんだけど。それをやっていたら、僕は定年より後まで立教にいたんだよ。（笑）それは結局つぶれてしまつたんだよ。

——文部省はどういうことが気に入らないんですか。

渡辺 あのころ国際が増えてほうほうでできたので、もう内容なぞ見もしないで国際はたくさんだ。福祉のほうに移るような時期だったんだよ。皮肉なことに、その後僕はなんと共立女子大の国際文化学部の教授になつた。（笑）

——そうすると、九六年三月に先生は立教を退職されて、新学部設置準備の本部長、総長補佐を前年までなさつてお辞めになつた。

渡辺 もうめどはついていたしね。

学生部の特異性

——先生の立教生活の中で最大のハイライトというと、やはり紛争前後のことでしょうか。

渡辺 紛争から九〇年までの二〇年は、立教は本当によかったね。苦しい時代でもあったけれども、さつき言ったようにユートピアで、周りの友人たちにいい人がいたし、いい仲間がいたし、研究、教育とあらゆることでよかった。しかも、教育の面でも新しい計画をすれば、みんな同意してくれて、いろいろな新しい冒険ができた。論文入試とか、つぎつぎと発想することが実現できた。仏文を作るのも大変だったけれども、ともかくあれだけ紛争で苦しんだ報いはあったという気がしている。(笑)——そういうものは先生方が作っておられたのだと、いまにして思います。

渡辺 と同時につくづく感じるの、もう一つ、見逃してはいけないことだけど、立教は職員がいい。どこでも大学というのは、教員と職員の間がいつでも問題で、教員が威張っている。僕はこれは紛争のおかげがあると思うんだ。

学部長のときに各地の同窓会に行かされるでしょう。必ずおまえは外様だと言われる。あれぐらい腹を立てたことはないんだよね。要するに立教出でない。「立教出でないのに何が分かるか」と言わんばかりのことを言うんだよね。だいたい三年だか四年だかしか立教にいないくせに、何を言っているんだ。僕はどれだけ立教で苦労しているか。そういう気風というのは、大学のなかでも

紛争まではあったんだよね。

職員はほとんどが立教出でしょう。そういうのがあったけれども、職員も紛争のおかげで、立教出というのはどういふものなのか。立教出ではなくても、立教の好きな人はどれぐらいいのか。そういうのがよく分かってきた。だから、紛争というのは非常にいい教職員の教育の機会だったんじゃないのかな。あのおかげで、お互いに話し合えるし、一緒にいろんなことができる。僕らが手弁当でやっているということも、職員のほうに分かってくると、一緒にいろんなことをしてくれる。

そういう空気が大昔からあったのは学生部だね。紛争前からそういう空気が一番あった。そういうアングレリカ的な、ヌエ的な良さは、大須賀さんも学生部長だったし、学生部あたりから来ているのかもしれないな。

——学生部というのは、そういう意味ではキリスト教的な青年教育の牙城みたいなところだったということだったんでしょかね。

渡辺 そうそう。学生と接触しているしね。——岩井祐彦先生〔五九一六三年学生部長〕もいらっしやった。

渡辺 そういう空気はあそこにあったんだね。そういう意味でキリスト教が生きている場所ですね。

——そういう大学生活を送られた先生からご覧になる

と、立教に限らず、いまの大学に関してはいろいろとおありでしょうね。

渡辺 あるね。(笑) いま見ていると、日曜日は推薦入学だオープン・キャンパスだ何だと、土曜・日曜も働かされて、夏休みもないみたいで、教師が昔と違って忙しいと文句をいうのも分からないわけではないけれども。僕は休むときにはちゃんと休んだよね。いつも夏は東京にいなかった。尾形さんに言われちゃしようがない、車で那須から会議に出てきていたけれども、そういう区別ははっきりしていた。休みにはそこで仕事をしていたからね。

——社会全体に余裕がなくなってきたということですかね。

渡辺 そうそう。と同時に、要するにグローバルゼーションで、その悪影響で余裕がなくなつて、切迫している。問題なのは、何も大学ばかりじゃなくて、あらゆるところがそうだと思うけれども。

いまは原発事故の問題もあるでしょう。フランスあたりの週刊誌はすごいよ。これはある意味では大きな歴史の転換点ですよ。これをどうやって切りぬけていくのか。もう少しみんな考えないとね。いま原研というのはどうなっているの。

——廃止に向けて措置中で……。でも、原子力研究所が

どうなったかということも当然重要なんです。実は原子力研究所というのは戦略的に入れている。単に原子力について研究するということも当然ありますが、かなり戦略的に入れているものなので、おそらく「一五〇年史」の叙述においても、これをもう一度ちゃんと位置付けをする必要があるかと思うんですね。

渡辺 そうだね。悪い意味じゃなくて、立教の理学部は理科専から来ているけれども、ともかく武谷さん(三男。原子物理学)はいたし、さっきの小川さんだってそうだし、優秀な人がいて、それなりにきちんとしたことをしてるわけだから、そのへんは歴史を見る上ではつきりと総括しておかないとね。

——そんなところでしょいかね。貴重なお話をいろいろお伺いできました。また起こした原稿で、いろいろと間違いが出てくると思いますので、手を入れていただきまして、「一五〇年史」執筆上の参考資料として活用させていただきます。

実は今日お持ちした最新号の紀要『立教学院史研究』には、伊達さんのインタビューが出ております。おもしろいことに、伊達さんは大須賀総長を評価していなくて、あの人は何もしなかったとおっしゃっています。

渡辺 だって、僕が学部長のとき、伊達さんは総務部長だったんだから。

—— 甲藤さんのインタビューをしたときには、大須賀総長を非常に高く評価されていました。まったくブレなかったと。

—— ただ、三人の方にお話を伺って、それぞれ話す内容もスタンスも違うんですが、一つだけ共通しているのは、学生部に対する評価です。立教の学生部の位置付けがかなり特殊、性格が特殊なんだということは、皆さんほぼ一致されています。

渡辺 ある意味ではアングリカンのいいところを一番早くからちゃんとやってきたのが、学生部だという気がしますよね。あそこはチャプレンとも関係があるし、そういう意味では学生部というのは大事なんだよね。昔から学生部のキャンブなんかをやっていたわけでしょう。そういうところで教員同士も学部学科をこえてけっこうう良くなる。僕が野口さん〔定男。中国哲学。六七―七〇学生部長〕と仲良くなったのはそこです。

立教の専任になると通過しなければならぬところがいくつあるんだよ。立教キャンブに行くことと、組合の執行委員になることもそうです。僕は全部やっているんだよ。ちゃんと執行委員までやっているんだから。(笑) ただ、僕が執行委員のときは、死んだ高橋康之さん〔民法学。七〇―七三年法学部長、七四―七五年、七九―八三年総長室長〕が副委員長で、委員長は誰だっ

たか忘れちゃったけれども、ともかくいつでも組合のそれまでの方向とずいぶん違うような方向を出した。その後、委員長になったのが山田耕之介だったかな。要するに学生部の対極にあるのが組合なんだよね。

そういう意味では、そういう二つの流れがあつて、「文学部のあつた」六号館は学生部と同じ側にあるんだよ。(笑)

—— 五丁目の人と三丁目の人という言い方もしましたね。では、どうも長時間にわたりましてありがとうございます。